



The Yellow Ribbons

ゆるしのリボン

3年の刑期を終えたばかりの一人の男が、長距離バスに乗り込んだ。男は窓の外を眺めながら、ずっと考えこんでいる。妻のところに戻るものかどうかと思い悩んでいたのだ。出所したとは言えども、これまでさんざん、いざこざを起こしては迷惑ばかりかけてきたので、妻が自分をゆるして再び夫として迎えてくれるかどうか自信がないのだ。

出所にあたって、彼は妻に手紙を出してあった。「もうすぐ、出所する。もしも、ぼくをゆるしてくれるなら、家の前にある榎の木に黄色いリボンを結んでおいてほしい。」

男はこう決めていた。もしリボンが結ばれていなかったら、そのままバスを降りずに、遠くの町へ行こうと。

家が近づくにつれ、男の表情はこわばっていった。バスの中、その男の話聞いた乗客たちは、「大丈夫だよ、きっと待っていてくれるよ。」と励ましの言葉をかけてくれたが、彼にしてみれば、あんなひどいことばかりしていたのだから、ゆるしてもらえなくて当然だと感じていた。しかし、その手紙に、ひとかけらの希望を託していたのだった。

バスは、妻のいる町に入った。あの角を曲がれば、約束の榎の木が見えてくる。男は、鼓動が高まり、怖くて顔を上げていることもできない。「きっとリボンはないだろう・・・」考えるだけで心臓が締め付けられる思いだ。それで、バスの運転手に頼んだ。

「運転手さん、ぼくの代わりに見てくれませんか・・・。」

バスは角を曲がった。一瞬の静寂の後、大きな歓声があがった。

乗客が全員立ち上がって、喜んでいる。

目を上げると、一つどころか、100個以上のリボンが、まるで満開の黄色い花のように榎の木に結ばれていたのだ！ その光景が涙でにじんだ。乗客の喝采を背に、男は妻の待つ家に向かったのだった。

これは、1973年にアメリカで大ヒットし、何人ものシンガーによって歌われてきた「幸せの黄色いリボン (Tie a Yellow Ribbon 'Round the Old Oak Tree)」という歌の元になったストーリー(ピート・ハミル原作)です。その歌は日本でもヒットし、山田洋次監督の映画「幸福の黄色いハンカチ」のモチーフとなり、テレビのCMでも使用されたほどでした。